

心理動詞らしさの意味論 —心理的事態の “いま・ここ・わたし、性と内的視点—

川上 夏林
(京都大学大学院)

要旨

川上(2013)、(2015)では二つの心理動詞タイプについて論じた。一つは *énerver* や *gêner* などの語彙的心理動詞タイプ。もう一つは *frapper* など動作動詞から心理動詞へと拡張したタイプである。アスペクトの点からみると、両者は同じアスペクト構造を持つと考えられるが、焦点化される相がそれぞれ異なる。前者は状態相が焦点化され、後者は変化相が焦点化される。事例(1)、(2)が示すように、状態焦点型では現在形・半過去形、状態変化焦点型では複合過去形が取られやすく、この傾向は両者のアスペクトタイプの違いを反映したものとして説明可能になる。

- (1) a. Je n'arrive pas à comprendre et ça m'énerve. (Appel du pied)
b. Cette présence dans mon dos me gênait. (L'Etranger)
- (2) C'est seulement quand il m'a déclaré : « Maintenant tu es un vrai copain » que cela m'a frappé. (L'Etranger)

しかし「心理動詞の意味論」という枠組みから見たとき、このアスペクトタイプの違いはどのような意味を持つのだろうか。本論ではこの問いを「心理動詞らしさ」という問題に結びつけて考察を行う。心理的事態の “いま・ここ・わたし、性に着目すると、心理動詞と「内的視点」の密接な結びつきが見えてくる。すると、「内的視点」が置かれやすい一人称・(発話時)現在形・状態性・非動作主を特徴とする事例(3)のような構文に現れる動詞がもっとも心理動詞らしい動詞として位置付けられる。その他の事例は、人称・時制・アスペクト・主語の性質が上記の基準をどれだけ満たすかによって「内的視点」の置かれやすさが決まり、それに相関して当該動詞の「心理動詞らしさ」が決定することになる。

- (3) a. Ah, ça m'énerve !
b. Ah, ça me tue ! (川上 2014)

つまり、状態焦点型と状態変化焦点型のアスペクトの違いは、「内的視点」の置かれやすさの違いを意味し、状態変化焦点型のほうが状態焦点型よりも「心理動詞らしさ」が低いという結論に至る。また本論全体を通して、「心理動詞とそうでないもの」という従来の語彙意味論的立場や、あるいは「心理動詞不要論」を採る立場とは異なる観点から心理動詞の意味分析が可能であることが示される。